

政策立案コンテスト 2018 政策提言書

チーム名
八王子 CARP
政策タイトル
親子授業制度 -親と共に創る義務教育-
理想の国家・社会像
<p>必ずしも「強い個人」を前提としない社会、助け合い・分かち合いの社会、課題を共有しあえる社会。ただし、家庭以外の地域コミュニティに依存するのではなく、家庭を基本単位とする。</p> <p>ともに何かを成し遂げたい、喜びを共有したいという欲求の実現が容易な社会。それら欲求を満たしやすい状態であれば、結果的に誰もが人とつながっているの、将来、不測の事態に陥ったとしても、助けてといえる人がいる、助けてといえる（図 1）。</p> <div style="text-align: center;"> <p>予測困難な事象 予測可能だけど避けられない事象(老化や超高齢社会突入など)</p> <p>The diagram illustrates a timeline from left to right. A horizontal arrow labeled '個人が見えている範囲' (Individual's visible range) spans the width. A vertical arrow labeled '時間' (Time) points downwards. A red arrow points from the top text '予測困難な事象' and '予測可能だけど避けられない事象(老化や超高齢社会突入など)' down to the diagram. On the left, a blue box labeled '機能する' (Functional) contains: '生活に困らない' (Not troubled in life), '自分の欲求をある程度は満たせる' (Can satisfy one's needs to some extent). Below it, a green box labeled 'それでもつながりたい' (Even so, want to connect) contains: 'より高次の欲求(well-being)' (Higher-order needs), '自己効力感' (Self-efficacy). A green arrow points from this box to a green box on the right labeled 'つながる人がいる' (People to connect with) containing: '包み隠さず助けてといえる' (Can be helped without reservation). Below this, a green box labeled '機能回復・代替' (Functional recovery/alternative) contains: '支え合い・分かち合いの社会' (Supportive and sharing society). A green line labeled '目指すべき価値観' (Target values) points to the green boxes.</p> </div> <p>図 1 目指すべき社会：人との関係性を率直に喜びと感じる国民が多い社会 将来の不測の事態からの回避でなく、喜びの実現を動機としてコミュニティが自然に形成される社会 結果的に将来の不測の事態からの回復ができる</p>
解決したい問題と、その根本的な原因
<p>【政策立案の動機】</p> <p>孤独死、自殺、子供や高齢者・障害者へ虐待、介護放棄殺人や介護疲れによる無理心中など、ニュースを連日のように目にします。誰も願った結果ではなかったはず。誰かに助けを求めることはできなかったのだろうか、相談できる家族や友人がいてくれれば…。今あらためて、「助けて」といえる社会、弱さを分かち課題を共有できる社会、つまり、人と人との「つながり」が必要になってきていると感じております。</p> <p>【解決したい問題】</p> <p>近代社会は、生きていくうえで必要なものがそろい、コミュニティ（共同体）を形成せずとも生活できるようになりました。つまり、何事も「私のこと」として捉え、自由に生活できるようになったということです。しかしそれは厳しい自己責任を伴い、勤勉で自助できる「強い個人」であることが前提であることが期</p>

待されるようになったとも解釈できます。「おひとり様ブーム」という語はこの現象を代表しています。

しかし、人はだれしも、「強い個人」であり続けることは不可能です。誰しもが老化を経験し、他者の助けなしには生活すらままなりません。また、予測困難な事象によって「強い個人」ではなくなる場合もあります。東日本大地震のような予測困難な大規模な災害、職場におけるハラスメント、AIの台頭や市場の国際化に伴い、職を失う可能性さえあります。つまり、「強い個人」として、一人で生活することができるというのは、そもそも目先のことにのみ視点当てることで生じる錯覚であり、目線を中長期的な未来へと移すと、当たり前に行えていることができなくなるのは誰にでも起こりうることであり、一人で生活するという選択は大きなリスクを背負う選択なのです（図2）。

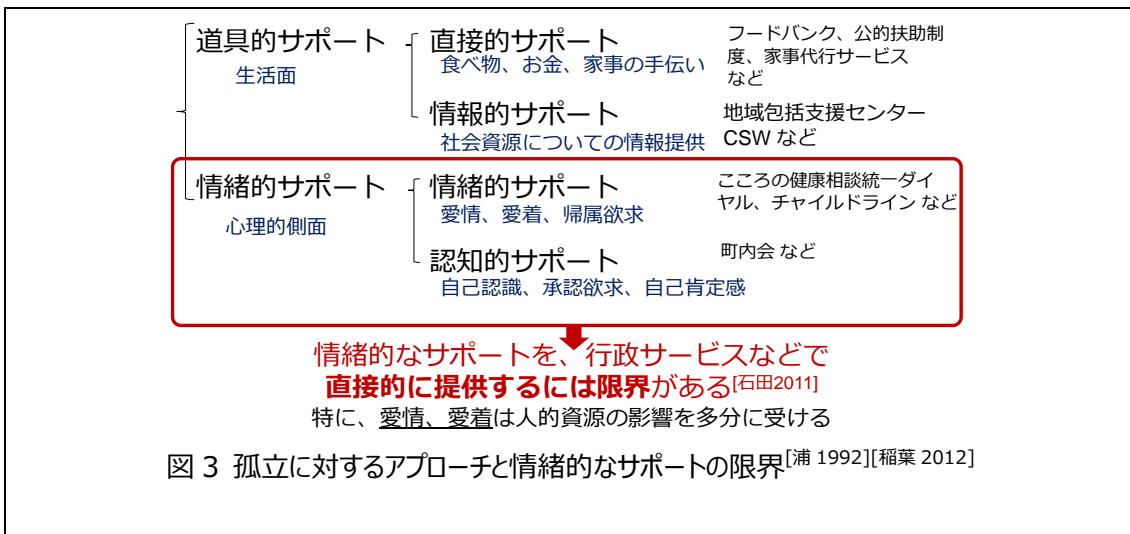


深刻な無縁社会到来の危険性

図2 解決したい課題：深刻な無縁社会到来の危険性

このような社会的孤立の問題に対して、公的セーフティネットとして社会保障や社会福祉制度といった仕組みを整え、個人を支えてきた歴史があります。しかし、このようなセーフティネットは当事者の利用意思が前提されており、行政の介入を拒否することも可能です。孤立死についての調査では、深刻なケースに共通してみられる傾向は介入拒否の意思表示であるという報告もあります。自己肯定感の低さや自己効力感の低さなどの心理的要因がそうさせていると考えられます。

それは誰しもが陥る可能性がある心理状況だと考えます。そのような意味で孤立の末期に至る前段階の状態、価値観が形成される段階である、家庭あるいは義務教育への介入が必要であります。



政策案（比較案があれば併記）

【親子授業制度 -親と共に創る義務教育-】

●コンセプト：親が参画しやすい義務教育の実現

基本的な価値観が形成されるのは親との関係です。また、誰もが生まれながらにして所属するコミュニティであり、生涯にわたって所属するコミュニティとも捉えることもできます。本政策の焦点は親子関係にあり、誰もが通過する義務教育の場を通して親子の関係を深め、不確実な昨今の社会を生き抜く国民を育てる教育現場づくりを目指します。義務教育の場を親が共に創る場と捉え直し、「**親子授業**」を取り入れ**親子の対面の場**とします。

親子授業においては、親と子が一緒に考えるべき問題を切り口とした課題を課し、手や体を動かしながら子供と共に取り組みます。親は親心を形にする機会となり、子供との関係を省みる機会にもなります。また、子供は知っているようで知らない親の側面を知り、感じ、親への愛着あるいは家庭の温かさに触れる機会となります。

親は義務教育を外から見守るのではなく、現場の先生とのコンタクトを取りながら、**成長**していきます。**家庭環境が悪くとも、他の家庭との関係の中で、家庭の温かさを感じる。**

●イメージ

親子授業の実施方法

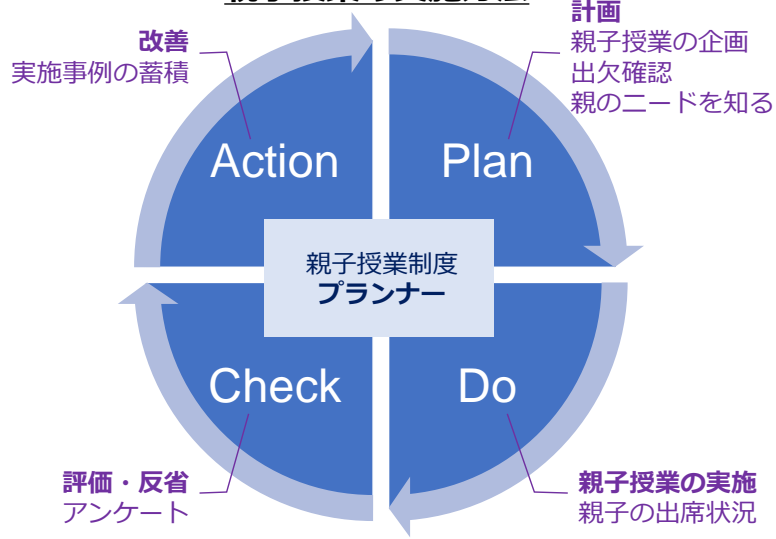


図4 親子授業の実施方法



図5 実施イメージ ライフデザイン教育（左）、マシュマロチャレンジ（右）

子供にとって の魅力	親あるいは友達との親との触れ合いの中で、 <ul style="list-style-type: none"> ● 親に対する愛着や愛されている実感を持てます ● 自己肯定感や他人を思いやる心が育ちます ● 家庭の温かさに触れることができます
親にとって の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ● 親心を具体的に表現する機会を持てます ● 親として子供と考えるべき課題に取り組むことができます ● 他の保護者との関係を築くことができます ● 教育現場、教員への理解が深まります
教職員にとって の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ● 子供の知らない側面を知ることができます ● 保護者（親）との関係が向上します
地域にとって の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校が社会のつながり、地域のよりどころとなります ● 学校を中心とした地域ネットワークが形成されます

【比較案】

家庭への介入の仕方には政策以外にも複数あるが、どれもつながる意思が前提され、価値教育を直接なすものではない。

- ・ホームスタート：家庭訪問型子育て支援ボランティア
- ・ストーリーパーク：IT 端末を利用し、家庭と学校をつなぎ子供の成長をサポート
- ・グロースリンクかちどき：子供が遊ぶ場所を提供し、子供・親子を中心に様々な年代を含むコミュニティ形成